

2022年2月27日 佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書4章21～25節

説教題：神の国を大らかに生きる

今日はタイトルを「神の国を大らかに生きる」としました。「マルコ福音書」4章は、イエス様が「神の国」について一生懸命に「譬え」を使って語っておられる個所です。前回の「種を蒔く人」の譬えもそうです。「神の国」とは何かというと、2000年前、イエス様が地上に来られたことによって、人が神の恵みに触れることの出来る領域が生まれました。どこに生まれるかということ、それはまず、イエスを信じる人の心に生まれます。「心の中に」と言いましたが、同時にその人を包むように存在すると言っても良いと思います。目には見えません。でも確かに存在する。その領域を「神の国」と呼びます。「神の恵みの支配」の領域と言っても良いでしょう。

「分かり易い譬えはないか」と考えて思いついたのが、『『神の国』とは『冷戦時代の西ベルリン』のようなものだ』ということです。東西冷戦時代、ドイツは東と西に分断され、西ドイツは西側自由主義圏に位置し、東ドイツは東側社会主義圏に位置しました。東ドイツの首都はベルリンでしたが、ベルリンは、西ベルリンと東ベルリンに分けられていて、西ベルリンは、東ドイツにありながら西ドイツ領でした。西ドイツ本国と西ベルリンの間には、直通の列車(高速道)が走っていて、ある時期、東ドイツの人々は、西ベルリンに入れば、そのまま西ドイツ(自由主義圏)に入れたのです—(詳しいことは分かりません)。だから東ドイツ市民が西ベルリンに入るのを阻止するために造られたのがベルリンの壁です。私の中でそのイメージです。東ドイツにありながら、西ベルリンに入れば、自由世界の保護下に生きることが出来る。この世に在っても、「神の国」に入れば、私達は天国と繋がり、神と繋がり、神の恵みの保護下に入って生きて行ける。そして直通列車が国境を越えて自由主義圏へ入って行ったように、「神の国」に入っていれば、死の壁を越えて永遠の御国へと私達は運ばれて行くのです。(下手な譬えですが、精一杯の譬えです)。

イエス様が伝道生涯で語られたことは『『神の国』が来ている。その『神の国』に、皆に入りたい』ということです。「あなたが自分をどんな風に思おうが、神はあなたの魂を愛しておられるのだ。あなたも『神の国(神の保護下)』に入り、そしてそこからそのまま『永遠の世界』に入りたい」、それが、イエス様が語られたことだと、私は理解しています。

今日の箇所も、その文脈にあります。イエス様は「神の国」についてここでも熱心に語られます。21～25節は、23節の「聞く耳のある者は聞きなさい」(23)という言葉によって2つに分けられます。21～22節は「あかり」の譬えであり、24～25節は「量り」の譬えです。その2つの譬えを「良く聞いて欲しい」ということなのですが、イエス様は、「神の国」の何を、どのように話し、どう聞いて欲しい、と言われるのでしょうか。

まず21～22節ですが、「あかり」とは何でしょうか。「新共同訳」は「ともし火」と訳しますし、「リビング・バイブル」は「灯をともしたランプ」と訳しています。小さな水差しのようなものに油が入っていて、芯が浸してあって、芯の頭に火が灯されている、そういう物のことでしょうか。その「あかり」を持って来た人が、それを柀の下や、寝台の下には置きません。「燭台の上に置くのではないか」と言われます。「柀の下」というのは、その「あかり」を消す時に、柀を被せたようです。そしてそれを寝台の下にしまったのでしょうか。何を話しておられるのでしょうか。

これは、イエス様の招きの言葉、あるいは—(イエス様は「ヨハネ8:12」で「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」(ヨハネ8:12)と言っておられます。イエス様は人生の闇に「光」をもたらすために来られた。その—イエス様という光を受けて生きる弟子達、そして私達の生き方、信仰生活のことが言われているのではないのでしょうか。イエス様は22節で「必ず現われるためであり」(22)、「明らかにされるためです」(22)と言われます。「神の国」は、見えないのです。しかし「種を蒔く人」の譬えでも、イエス様は「御言葉を良く受け入れる良い土地になれば、豊かな実を結ぶ

ことが出来るようになる」と言われました。それは「神の国」、「神の恵みの支配」という現実が来ているからです。その中で「豊かに生きなさい」という励ましを、ここでも続けて語っておられるのです。そしてここでの励ましというのは、「イエス様という光を受けた者、『神の国』を生きる者は、それを隠してはいけない、その光が、その恵みの支配が明らかにされるように生きて行って欲しい」ということではないでしょうか。

尼僧からキリスト教の伝道者になられた「藤井圭子」という先生がおられます。色々な場所でご自身の証しをしながら、信仰の恵みを語っておられます。先生は、ご主人が入院をされた時、「本当に病院に行きたくなかった」と言われるのです。ご主人との関係が良くなかったのでしょう。車に乗ると「行きたくないな」という思いで心が一杯になる。しかし、妻だから行かなければならない。病院に行くとうまい妻を演じる。しかし心の中は乱れている。そのどろどろした偽善に苦しまれるのです。解決の道がない。そんな時に教会に導かれるのです。かつて尼僧として修行をされましたが、『仏教は人間が辿り着いた最高の哲学だ』ということは分かったけど、仏教の中に私の求めていたものはなかった」と言われます。キリスト教の中に一縷の希望を持って救いを求めるのです。そして、家の隣にある教会で行なわれた特別集會に参加した時、絞り出すようにして「私も信じたい。信じて救われたい」と手を上げたのです。牧師が祈ったそうですが、何もなかった。ところが翌日、車に乗って病院に行こうとしたら、「行きたくないな」という気持ちが起こって来ないことに気付くのです。それは先生にとって大きな、大きなことでした。先生は『解放』というか『救い』というか、それを経験されるのです。先生は、現実に関われる神を見出されて、そこからクリスチャン生活が始まるのです。

イエス様の『神の国』に入って欲しい」というメッセージは、言い換えれば「あなたも闇の中で苦しむのではなく、光の中で生きて欲しい」というメッセージでもあるのです。藤井先生も、医者として出発したばかりのご長男を亡くされたり、大変なところを通られます。しかし、平安は奪われない。それが「光に照らされて生きる」ということなのでしょう。先生は、その私達を支える恵みの世界があることを語っておられるのです。

さてしかし、イエス様は21節で「あかりを持って来るのは、柀の下や寝台の下に置くためでしょうか」(21)と言っておられます。言い換えれば「あなた方は、あかりを柀の下に入れて消そうとする、ベッドの下に置いて見えないところにしまおうとする」ということです。どういうことでしょうか。今、イエス様の目の前にいる弟子達が、イエス様の光に照らされて生きる生き方、「神の恵みの支配」の中を生かされている現実を、隠そうとしている、ということなのではないでしょうか。弟子達は、イエス様に信頼を置いてついて歩いていました。イエス様の言葉に、為される業に感動もしたでしょう。しかし一方、イエス様と共に生きることに戸惑いもあったのではないのでしょうか。例えば、他の宗教家は「安息日を守ってどんな仕事もしてはならない」と言っている。イエス様は、安息日だろうが何だろうが、病に苦しむ人がいると癒される。目立つわけです。目立つだけなら良いのですが、反発を感じる人もいます。それだけでなく、潰しに掛かる人もいます。そうすると弟子達は一方では感動しながら、もう一方では不安になるのです。

私は昔から「人並み」ということを言われて育ちました。「何事も人並みにする(世間の人と同じようにする)。そうすると波風が立たない」。一般に日本人はそうではないでしょうか。「人がどうするか」、それを見て自分の行動を決めるところがあります。それは、良い面でもあるかも知れません。強制されなくても、皆がコロナ禍に気をつけるというような形で現れています。だから、まだ今の数字で収まっているのだと思います。しかし私達は、信仰についても「人並み」で行こうとするとところがあれば、それはイエス様が「気をつけなさい」と言っておられることだと思います。日本ではキリスト者は、圧倒的に少数派です。その中で「人並み」に生きようとする、信仰は隠れてしまいます。いや(極端かも知れませんが)やがてはクリスチャンなのかどうなのか、分からなくなってしまう、そういうことになるのではな

いでしょうか。

イエス様は言われました。「聞く耳のある者は聞きなさい」(23)、それは「分かる人だけが分かれば良い」ということではありません。「聞いて、分かって欲しい」というイエス様の訴えです。24 節に「聞いていることによく注意しなさい。あなたがたは、人に量ってあげるその量りで、自分にも量り与えられ、さらにその上に増し加えられます」(24)とあります。これは後半の御言葉に入るのですが、しかし「リビング・バイブル」はこの言葉を「また、聞いたことは必ず実行しなさい。そうすればするほど、わたしの言ったことがわかるようになります」(LB24)と訳します。イエス様の教え、イエス様の光に照らされて生きる生き方、歩みを隠さないで生きて欲しい、そのような生き方でこそ、信仰生活が祝されるのだ、と言っておられるのではないのでしょうか。私達が「信仰を生きよう」とする時、イエス様の御言葉の真実、神の恵みの支配の真実、それが良く分かるように、神様が祝福して下さるのではないのでしょうか。

以前もご紹介した「神の恵みの支配」の現実を教えてください。この方は、45 歳で妻を亡くし、やがて健康を害して、職も亡くし、「もう自分はダメなのではないか」という絶望の中で次のような思いに導かれるのです。「目の前の事態がどうこういう以前に、自分は御言葉によって本当に養われて行かなければ生きられないのだ」。そして「これからは、神の御言葉の約束にしがみついて生きて行こう」、そう思うのです。闇の中で光は見えなくても、まだ解決は与えられていなくても、聖書を通して魂に響く神の声がありました。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る…それゆえ、主は、あなたがたを恵もうと待っておられ、あなたがたを憐れもうと立ち上がられる。主は正義の神であるからだ。幸いなことよ。主を待ち望むすべての者は」(イザヤ 30:15,18)。彼は「主は、あなたがたを恵もうと待っておられ、あなたがたを憐れもうと立ち上がられる」という御言葉に信頼して、知り合いの会社に手紙を書くのです。やがて1人のクリスチャン・ビジネスマンの配慮で、彼は職を与えられ、人生を立て直して行くのです。そして「神が私のような者にも心を留めていて下さった…感謝しても、し尽くせない」という恵みを体験されるのです。彼はこう言うことができます。「今、人生の嵐の只中にいる方に申し上げたいことは、神様は生きておられるということです。神様は、善なる方で、善を成されるお方ですから、必ず良き道をあなたのために開いて下さいます。一人ひとりの願いや思いをはるかに勝ることをして下さる方であることを知って頂きたい。自分の力や実力だけで切り開いていかなければならない、というのではなく、信仰者はそこで、天の父への信頼を働かせることが許されています。様々なところを通っても、最終的に、ああ、やはり神は良き道を開いて下さったということが、私達に分かるようにして下さいます」。長く引用しましたが、「神の恵みの支配」は来ています。その中を、疑わず、信仰を隠さず、大らかに生きて行きたいと思うのです。

しかし、そのために大切なことを最後にイエス様は語って下さいました。イエス様は、24～25 節で「正しい量りを持ちなさい」と言うておられます。「正しい量り」を持てば、「神の恵みの支配」の現実が、ますます与えられる、と言われるのです。例えば、小さな枘という量りを持っていたら、少ししか恵みが入りません。しかし、正しい量りが、大きな枘だったとしたら、もっと多くの恵みが入ります。ある説教者が、この箇所の説教の中で「エレミヤ書」の言葉を引用していました。「主の名を口にすまい、もうその名によって語るまい、と思っても、主の言葉は、わたしの心の中、骨の中に閉じ込められて、火のように燃え上がります。押さえつけておこうとして、わたしは疲れ果てました。わたしの負けです」(エレミヤ 20:9)。預言者エレミヤは、もう主の言葉を語るまいと思ったのです。語れば語るほど、皆から憎まれるからです。しかしエレミヤは、神様の言葉が自分の中で燃え上がり、語ることを止めたままでは出来なかった、と言うのです。私も、イエス様が言うておられるのも、そういうことではないかと思いました。きっと、その「量り」を持てば、私達は、もっと神様の恵みの支配の現実を明らかに現しながら生きて行けるのだと思います。その「量り」とは何でしょうか。これもある説教者が「それは『悔い改め』だ」と言うていましたが、私も心から同意します。

自分の拙い経験ですが、私は神の助けが欲しくて教会に行きました。苦しい時、子どもの頃に覚えた御言葉「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」(マタイ 11:28)が甦って来たのです。それで、ずっと離れていた教会に戻ることが出来ました。そこから教会生活が始まりました。しかし、教会で語られることが良く分からないのです。日本語としては分かります。しかし、腹に落ちないのです。自分との距離があるのです。そんな時、私は職場での経験を通して「自分も罪人だった」ということがようやく分かりました。それまでは、人と比べて「人よりはましだ」とか、むしろ「良い人間だ」と思っていました。しかし、罪が分かりました。私は、神様に赦しを願い求めました。そして教会を通して、神の赦しの言葉を聞きました。そこから、神の恵みが自分のこととして分かるようになったのです。

罪人というのは、人と比べてどうのこうの、という問題ではないし、犯罪を犯した等ということでもないのです。自分も神に赦してもらわなければならないものを持っている、と認めることです。そして悔い改めるとは、神様は、こんな私がなおも神の御手の中で、神の恵みの中で生きて行けるように、イエス様を十字架に架けて下さったのだ、ということ認めることです。そして感謝することです。その感謝が、私達を「神の国」の証人として生かすのではないのでしょうか。そして、イエス様の灯りを映し出して生きて行けるようにするのではないのでしょうか。そしてそれが私達の中に、神の恵みがさらに入ってくるように、するのではないのでしょうか。

「アメイジング・グレイス/驚くばかりの」を作ったジョン・ニュートンは、嵐の中で神に祈り、「あなたを赦す、あなたを憐れむ」という声を聞き、「こんな者を恵んで下さるのですか」と感謝し、悔い改め、信仰に生きました。最晩年にこう言ったそうです。「私の記憶はほとんど薄れてしまった。しかし2つのことだけは覚えている。1つは私がとんでもない罪人であったこと。もう1つは、キリストはとんでもない救い主であったことだ」。人生の最後にこんなことが言える生涯は、素晴らしいのではないのでしょうか。「この心と体が朽ち果て、そして限りある命が止むとき、私はベールに包まれ、喜びと安らぎの命を手に入れるのだ」。「アメイジング・グレイス」英語の歌詞の5番です。彼は豊かに与えられました。そして、地上の「神の国」から「天の御国」へと凱旋して行きました。私達も「悔い改め」という「量り」をしっかり持って、「神の国」、「神の恵みの支配」の中を、願わくは、「神の恵みの支配の現実」を映し出しながら、大らかに歩いて行きましょう。イエス様がさらに豊かに、恵みに与らせて下さるに違いありません。